

生存者叙勲を受けた3人の外国地理学者

— M. シュヴィント, K. Z. ニノミヤ, G. H. カキウチ —

横山 昭市

はじめに

愛媛地理学会の運営母体である愛媛大学法文学部地理学教室は、1964（昭和39）年8月に創設された旧文学部人文学科（甲）の地理学講座を前身とし、本年は創設から40年を数える。1968（昭和43）年4月には、学部改組で地理学教室は法文学部文学科に属し、1993（平成5）年4月からは同学部人文学科の人間科学コース（大講座）に所属変更になり、1998（平成10）年に大学院修士課程の設置をみた。この経過のなかで、1984（昭和59）年8月に、地理学教室創立20周年記念行事を開催し、愛媛地理学会機関誌「愛媛の地理」第10号（1984）をその記念号として特集し刊行した。

20周年以降の20年間における当地地理学教室の主な変化として、次の諸点をあげることができる。第1は、上述したように学部改組に伴う学科構成の変遷をみてきたことで、中四国の国立大学のなかでは教育学部以外の文学部や法文学部における地理学専攻として、広島大学と岡山大学に次ぐ教室となってきたことである。第2は、教官の異動による世代交代があったことで、故村上節太郎（1975年定年退官、1995年逝去）、横山昭市（1994年定年退官）、深石一夫（同2002年）各位が名誉教授となり、呉羽正昭助教授が筑波大学に転任（2000年）、現在は、藤目、寺谷両教授と堤助教授が教育・研究に当たっている。

第3は、本稿に関わることであるが、教育・研究の国際交流が進んだことである。教官の外国への研究出張や国際会議への出席が多くなった一方では、外国からの研究者の来訪機会も多くなって、集中講義や愛媛地理学会での講演、「愛媛の地理」への寄稿などをいただき、交流の国際性を高めることができた。とくに、表題に記した3人の先生は、それぞれ何回も来訪されたが、その日本研究や学術交流をはじめ松山との姉妹都市提携などの功績で日本国天皇の名による生存者叙勲を受けられた。このような功績のある外国の地理学

者の来訪を得たことは、地方大学の地理学教室としても名誉なこと、類例のないことでもある。3人の先生のうち2人の先生は、すでに故人となられたことは誠に残念なことである。本稿では、先生がたの来訪の機会をはじめ、その叙勲に微力ながら関わりを持った者として、それぞれの功績などを受章された順に紹介し敬意を表したい。

M. シュヴィント先生（Martin Schwind, 1906～1991, ドイツ・ルール大学名誉教授, 1982年11月3日・勲三等旭日中綬章受章）

シュヴィント先生（写真1）は、1979（昭和54）年にエヴァ夫人同伴で約半年に亘って日本各地を訪れ、当教室には5月に初めて来訪し、松山・今治・新居浜などを視察した。この間に、主に学生を対象に特別講義をしていただき、その内容は「日本の過去・現在そして将来」と題したもので、邦訳は「愛媛の地理」8号（1979）に巻頭論文として掲載された。この時の日本研究の成果は、Das Japanische Inselreich, Band 2（1981）の大著として刊行されたが、松山と三津浜の都市機能特性を述べたなかで、特に三津浜に関し、藤井和弘君（法文17回卒）の協力で作った土地利用図が1ページ大で掲載されたことは光栄であった。本書は



写真1. シュヴィント先生の叙勲伝達式（於在西ドイツ大使公邸, 左奥にエヴァ夫人, 1982年11月）。

658頁にもおよぶ大著で、シュヴィント先生75歳の時の刊行で、その精力的な研究と著作には全く驚くほどであった。

当教室創立20周年の記念特集の「愛媛の地理」10号(1984)では、外国学者からのメッセージとして、英文の寄稿をいただき、松山と愛媛が将来とも高質な生活環境を持続してゆくことを期待すると述べた。シュヴィント先生は、すでに1982年秋に生存者叙勲を受章されていて、1985年5月の当教室へ再訪では、その略章を襟に付けておられた。この時は、単身の来訪で病軀をかばいながら、八幡浜・大洲などを視察された。帰国後、日本をふくむ東アジア研究の成果を Japan-Die neue Mitte Ostasiens (1987) と題して327頁もの大著にまとめて公開された。特に日本については、その地理学研究的展開を3人の学者を通して述べている。明治期を故多田文男(東大名誉教授, 1900~1978)、大正期を故矢沢大二(都立大名誉教授, 1913~1994)、そして昭和期を横山昭市(1928~, 愛媛大学教授)に代表させているが、多田先生は地形学、矢沢先生は気候学と各々の分野の大家で、近代地理学の発展に主導的功績を示した東京の大学教授であった。これに対して筆者(横山)は、人文地理学の専攻で外国研究の実績があるにしても、東京から地方大学に移って、四国や瀬戸内など地域研究をも志向していた所謂戦後派の地理学者だと見られたことによる。高名な外国学者の日本研究の大著で、4頁にも亘って評されたことは身に余る光栄だった。

シュヴィント先生の業績や人柄の詳細は、浮田典良京大名誉教授の紹介(1985)や矢沢大二先生による紙碑(1992)に譲るが、敬服に値するのは、自然や歴史・文化・社会・政治などへの該博な知識と、その総合的思考による地誌学的研究を背景に日本研究を集大成されたことである。旧東ドイツのライプツィヒ東郊の小村ホーブルクで生まれたシュヴィント先生は、26歳の若さでライプツィヒ大学で文学博士を取得、1934年から5年間に亘って東京のドイツ学園教師として夫人と共に在日したことが日本研究を生涯続ける端緒となり、帰国後の論文 Gestaltung Karafutos zum japanischen Raum により大学教授資格を取得し、戦後は幾つかの大学の教職を経て名門のフンボルト学園長を1968年まで勤めた。さらに新設のルール大学(ボフム)に名誉教授として招かれ、同大学地理学教室の日本・アジア研究の発展に貢献し、75歳で定年退官し

た(1981)。ルール大学は、戦後のドイツでの日本・アジア研究の中心的存在となり、愛媛大学に何回も来訪された故P. シェラー教授(1923~1988)をはじめ、その直系弟子のW.フリヒター教授(デュイスブルク大学)など多くの地理学者輩出の基礎をつかった。シュヴィント先生は、研究業績から台湾の学士院会員(1957)や日本地理学会名誉会員(1975)、東京地学協会学術賞(1985)などの栄誉を受けられた。

戦前・戦後に亘って、日本研究に輝かしい業績をあげられたシュヴィント先生が、何故親しくも愛媛大学に来訪されたのか。それは、筆者(横山)が1967(昭和42)年に、文部省在外研究で当時の西ドイツに滞在していた時、首都ボン南郊のバドゲーデスブルグでの第36回ドイツ地理学会大会に日本からただ1人参加し、シュヴィント先生から流調な日本語で声をかけられたことに始まる。筆者の西ドイツ滞中は、「国境地域の政治地理学的研究」を目的としていたことから、奇しくも先生の政治地理学と国境研究への志向によるアドバイスを受けたこともあって、互いに親近感を持ったことが、その後の学術的交流を継続するに至ったと思われる。

変哲なことであるが、二人の間では、切手収集の趣味が共通していたこともある。何れにせよ、限りなくドイツ人として民族意識の濃厚であったシュヴィント先生の日本研究には、日本人として畏敬の念を感じたのは筆者だけであろうか。

K. Z. ニノミヤ先生(Kazuo Z. Ninomiya, 1920~1999, アメリカ・カリフォルニア州立大学サクラメント校名誉教授, 1996年11月3日・勲四等瑞宝章受章)

ニノミヤ先生(写真2)は、アメリカの日系二世で、日本語名は二宮一男さんである。ニノミヤ先生の生存者叙勲の最大の理由は、日米間の民間交流の発展に尽

HOKUBEI MAINICHI Tuesday, Nov. 5, 1996 PAGE 2

秋の外国人叙勲
ニノミヤ・カズオさん
ズオさん 瑞4



ニノミヤ・カズオさん

外国人叙勲受章者のうち、ワシントン州コロムビア郡ワシントン・スプリングスに在住するニノミヤ・カズオさん(77歳)が、中・高時代に通学して英語を学ばせられたこと、その後の、同市ミッドウェイ(ワシントン州)に在住するニノミヤ・カズオさん(77歳)が、日米間の学術交流の発展に貢献したとして、勲四等瑞宝章を受章。また、ワシントン州立大学副学長に在任中のヨシムラ・ワシントン(77歳)が、日米間の学術交流の発展に貢献したとして、勲四等瑞宝章を受章。また、ワシントン州立大学副学長に在任中のヨシムラ・ワシントン(77歳)が、日米間の学術交流の発展に貢献したとして、勲四等瑞宝章を受章。また、ワシントン州立大学副学長に在任中のヨシムラ・ワシントン(77歳)が、日米間の学術交流の発展に貢献したとして、勲四等瑞宝章を受章。

写真2. K. Z. ニノミヤ先生の叙勲記事
(北米毎日1996年11月)

力されたことで、特にカリフォルニア州都のサクラメント市と松山市との姉妹都市提携（1981）による両市間交流の発展や、桃山学院大学・松山大学（旧松山商大）などの学生の滞米研修の継続に努められてきたことである。外国との姉妹都市による交流は、日本側にとって地域の国際化の展開で重要な手法のひとつであるが、この交流で先行したのは、ニノミヤ先生と愛媛大学の当地理学教室との学术交流であった。

ニノミヤ先生が初めて来訪したのは、1974年8月で筆者（横山）とアメリカ側の共同研究「瀬戸内・四国の都市化と行政域」についての予備調査で、在松中に愛媛経済同友会で「最近のアメリカ」についても講演した。次いで、1976（昭和51）年7月にニノミヤ先生企画のアメリカ・カナダの民間人や大学生による日本研修団41名が、東京・京都・広島・松山を訪れた時で、当方の当地理学教室の協力で松山市役所・砥部・魚市場・附属中学などを視察し、日本の地方文化・行政・教育について研修した（横山、1977）。その後は、サクラメントと松山市との姉妹都市提携後であったが、1982年1月に文部省外国人講師として当地理学教室で「アメリカ地誌」の集中講義（5日間）を担当し、この間に愛媛地理学会の第50回例会で「アメリカの日系人社会」と題しての公開講演を行った。そして、当教室創立20周年に際しては、「姉妹都市と国際理解の重要性」を強調したメッセージ（英文）の寄稿をいただいた（「愛媛の地理」、10号、1984）。

サクラメント（人口40万人）と松山との姉妹都市提携は、愛媛県内の同様の国際交流活動では、最も活潑に推移してきたが（横山、1994）、それは全くのところニノミヤ先生と令夫人の尽力に負ったものである。両市には、市花がカメリア（椿）である他には全く交流の必然性はなく、強いて言えば上述した当地理学教室との学术交流と、その背景となったニノミヤ先生と筆者（横山）との個人的なつながりが契機となったもので、詳しくは、「姉妹都市20年—松山・サクラメント」の特集記事（愛媛新聞、2001）の冒頭に記されている。サクラメントは、アメリカでも有名な住民の行政への監視意識の高いカリフォルニア州都として、政治機能が集積をみ、気位の高い都市で、しかも、日系人は決して多くない。ニノミヤ先生が松山との姉妹都市協会の設立と、その運営に努めた成果は、州立大学教授であり、日系人として社会的信用があったことが寄与している。他方、20余年も経過すると日系人社会

でも、3世以降は日本への関心が稀薄してきたとの変化に直面している。松山市からは、この功績に対し、特別名誉市民の称号を贈った（1982）。

ニノミヤ先生は、オレゴン州ポートランドで生まれ、一時日本に帰国（岡山県御津町）、1936年に再渡米し、第2次大戦中と戦後は軍役に服し、日本にも駐留の後でアイオワ大学修士（1953）、ついでワシントン大学（シアトル）で博士号取得（1972）、この間すでにカリフォルニア州立大サクラメント校（CSUS）の助教授（1970）、教授（1978）、退官して名誉教授となった（1990）。先生の専門は主として農業地理学であったが、ワシントン大学での博士論文は後述するカキウチ先生の指導のもとで、『北槎聞略』（1794）などの資料による日本の展開をテーマにした。先生は、日本語の読み書きが堪能で、その学識の深さが日米文化交流に著しく親近さを与えたことで、得難い日系二世であった。筆者は、1967（昭和42）年に、在外研究で西欧に次いで、アメリカ・カナダの国境地域の調査のためワシントン大学滞在時に初めてお会いしたのが縁で、その後愛媛大学との交流や松山との姉妹都市提携にまで発展したのは、全くニノミヤ先生の人徳によったものと敬意を表したい。

G. H. カキウチ先生（George H. Kakiuchi, 1924～、アメリカ・ワシントン州立ワシントン大学名誉教授、2002年4月29日・勲四等旭日小綬章受章）

カキウチ先生は、アメリカの日系二世で日本名では垣内弘明さんである（写真3）。生存者叙勲を受けられた2002年は、カキウチ先生の喜寿（77歳）に当たった年で、この意味でも誠にお目出度いことであった。受章の理由は、長年にわたる地理学—特に農村・農業



写真3. カキウチ先生叙勲伝達記念（於在シアトル総領事公邸、中央カキウチ先生、右は加代子夫人、左は齊賀総領事、2002年5月）。

の分野からする独自の日本研究と、日本の地理学者との共同研究の展開、ならびに日本の地理学者や大学生などのアメリカ研究に対する支援など学術的交流に著しく貢献された功績によっている。

愛媛大学との関わりは、まず文学部当時が始まる。故村上節太郎名誉教授（1909—1995、1981年に勲三等旭日中綬章受章）との共同研究による「広島県大長村のみかん栽培」について、連名でアメリカ地理学協会のテキサス州ダラスでの年次大会で発表（1960）、論文が同協会誌の *Geographical Review* に掲載された（1961）。1964（昭和39）年には松山を訪れ、村上先生とともに松山周辺の農業地域を視察し、また東京から着任して間もない筆者と再会した。

ついで1967年には、筆者の文部省在外研究で欧米の国境地域調査の対象のひとつに、アメリカとカナダとの国境地域があって、太平洋岸のワシントン大学を訪れ研究への示唆をいただいた。さらに1973—74年の1年間は、外務省所管の国際交流基金 Japan Foundation 派遣による客員研究教授として、日本研究の在米拠点大学のひとつであるワシントン大学で日本研究振興のため滞在したが、講義など各方面でご支援を得た（横山、1974）。筆者の帰国につづいて、村上先生が1974年に塩業研究のため渡米し、カキウチ先生と再会された（カキウチ、1975）。

1975（昭和50）年には、カキウチ先生が米国社会科学研究所協議会SSRCによる都市化に伴う日本農山村の変容の研究で、3か月に亘って国内各地を訪れ、愛媛県でも上浮穴地方の調査に同行した。1979年には深石一夫教授が北海道教育大学から着任したが、カキウチ先生とは既に面識があったことは奇遇であった。1985年には藤目助教授が文部省在外研究で、カキウチ先生の格別な好意でワシントン大学に滞在、つづいて筆者が日米友好基金（ワシントンD.C.）の助成で1988年に米国太平洋岸諸都市の再開発と活性化の研究によりシアトルを訪れ、カキウチ先生と再会した。

1990年代に入って、カキウチ先生夫妻のご親族が広島県在住であることもあって、松山来訪の機会が多くなった。1990年にワシントン大学を定年退官されたことで広島から来訪、つづいて東京で関係者による退官祝賀会が催され、90歳近い恩師の青野先生（後述参照）をはじめ、カキウチ先生退官記念論集『アメリカ・カナダの自然と社会』（1990）の大著が贈呈された。日本の地理学界で33名もの寄稿による外国学者に謝意を

表した本書は、恐らく前代未聞であったと思われる。ついで1992年に来日の折に松山に滞在、愛媛地理学会83回例会で「シアトル大都市圏の変容」について講演され、度々の来日にもかかわらず初めてという琴平を案内した。1997年には、カキウチ先生と筆者、深石教授（2002年定年退官、名誉教授、現奈良大学教授）の共通の恩師であった今治市出身の故青野寿郎教授（1901—91、東京教育大学名誉教授）の生地に建立された顕彰碑（1992年4月）を訪れた。ごく最近の2003年11月には、前年の生存者叙勲を受章されたことで広島に来訪、その折に叙勲申請の責任者だった筆者への挨拶を兼ねて来松、「島なみ海道」経由で広島・東京に行かれ、東京では日本大学等関係者による盛大な叙勲祝賀会が催された。

カキウチ先生の日本を主とした研究業績や日米間の学術交流への貢献などは、さきあげた退官記念論集（1990）やワシントン大学地理学科のCHRONICLE誌（1991）の拙稿で詳述したので参考にされたい。カキウチ先生は、カリフォルニア州都サクラメントの東北郊の農村リンカーンで出生、第二次大戦中は日系人であったことから収容所に入れられ、戦後は軍役に服して日本に駐留した苦難を味わった。退役後はパークカレッジ（モンタナ州）を経てミシガン大学（アナーバー）に進学、その東アジア学科を優等生で卒業、修士号を取得（1953）のちフルブライト奨学生として東京教育大学（現筑波大学）に留学、さらにミシガン大学日本研究センター（岡山県）にも滞在し（石田、1985）、日本の果樹生産農村の研究でミシガン大学から博士号を取得した（1957）。この業績によって、1957年にワシントン大学地理学科の東アジア講座の講師、ついで1968年には准教授となられ、1990年に名誉教授で定年退官された後も日本との共同研究や大学生の訪米研修などに精力的な活動を続けられている。

人文地理学でも農業・農村を主に研究されてきたカキウチ先生は、特に日本を対象に進められ、アメリカの地理学界で、この分野に輝やかな業績を示された。これを論文数からみると、1946～68年の日本に関するアメリカの地理学界73編のうち6編、なかでも農業・農村関係18編のうちの5編を数え、1961年～86年の先生の論文20のなかで、単著と日本側地理学者との連名は、それぞれ半数に及んでいる。1990年代では、日本大学や新潟大学などとの共同研究に参加されている。さらに注目されることは、日本の地理学者のワシント

ン大学における在外研究の受け入れが多いことで、カキウチ先生の尽力によるものだが、その客員教授や研究員では少なくとも40名以上、数回に亘る滞在研究に便宜を受けた者は延べ100名を超えている（横山，2001）。

この日本からの滞在研究者の多いことは、カキウチ先生が1963（昭和38）～1964年に亘って、フルブライトの交換教授として東京教育大学や東京大学で講義をされたことから、直接・間接にご交誼を得た研究者や学生が多かったこと、これらを通して戦後の日本地理学界におけるアメリカ研究の展開に大きな寄与をしたことによる。さらに1981年には、日本大学客員教授として出講し、若い世代にアメリカ研究への関心を高めさせてきたことも特筆に値する。筆者は、東京教育大学での青野研究室で同席したことからカキウチ先生と格別のご親交を得たが、戦後から半世紀に及ぶカキウチ先生の日米学術交流への功績を称える現地各紙の叙勲報道（*UW The Daily News Paper*, 2002その他）を読むにつけ、受章の栄誉の大きいことに感銘する。

あとがき

地方の大学の当地理学教室と愛媛地理学会にとって、その20世紀後半の活動の歴史のなかで、来訪された3人の外国地理学者の生存者叙勲への功績に多少なりとも関わることができたのは喜ばしいことである。ただ、シュヴィント先生とミノミヤ先生が故人となられたことに改めて弔意を表したい。また、1971年以来5回も来学され、愛媛地理学会で講演（1983）や地理学教室20周年にメッセージをいただいたドイツのP.シェラー教授（ルール大学，1923～1988）が、その日本研究半ばで逝去されたことは（森川，1995）、ご存命ならば叙勲を受けられたであろうと思ひ誠に残念なことであった。

外国の先生がたの叙勲は、まず在住国の日本公館による申請であるが、カキウチ先生の場合、筆者の打診に対して当時の在シアトル総領事斉賀富美子氏（のちに国連大使をへて現ノルウエー兼アイスランド大使）のご高配を得たことと、西岡久雄（前青山学院大学長）、山本正三（筑波大学名誉教授）、永野征男（日本大学教授）など諸先生の推薦文をいただいたことに、改めて深甚な謝意を表するしだいである。筆者は、最近、日本の政治地理学研究の系譜や外国学者の研究評論な

ど（横山，2002・2003）、学界の活動に関する論評を公刊しているが、本稿もそのひとつである。これらへの視点は、長年の研究生活を通して、将来発展への課題を提起できればとの願望を背景にしたもので、単なる回顧録としてではない。シュヴィント先生からは、ドイツ地理学の総合的な地誌研究の在り方を、またミノミヤ先生とカキウチ先生からは日系二世のアメリカ人としての日本研究への関心の在り様を伺うことができたことは、当地理学教室・愛媛地理学会の20世紀における貴重な学術的資産だと見ることができよう。当教室の、寺谷教授のアフリカ研究、堤助教授のオーストラリア研究をはじめ学生などによる外国研究や国際交流の展開が21世紀に向けて、輝やかしい学術的資産になることを期待したい。（愛媛大学名誉教授・本学会名誉会員，2004年3月20日記）

〈文献〉

- Schwind, M. (1975) : Religionsgeographie, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmschadt. 徳久球雄・吉田国臣訳、『宗教の空間構造』大明堂, 306頁。
- シュヴィント, M. (1979) : 日本の過去・現在そして将来, 「愛媛の地理」, 8. 1-6 頁。
- Schwind, M. (1981) : Das Japanische Inselreich, Band 2, Kulturlandschaft, Wirtschaftsgroßmacht auf engem Raum, Walter de Gruyter, Berlin, s. 590-594.
- シュヴィント, M. (1984) : 創立20周年へのメッセージ, 「愛媛の地理」, 10. 4-5 頁。
- 浮田典良 (1985) : ルール大学における日本地理研究, 石田寛編『外国人による日本地域研究の軌跡』古今書院, 152-159頁。
- Schwind, M. (1987) : Japan-Die neue Mitte Ostasiens, Erlebnisse, Forschungen, Begegnungen, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, s. 307-312.
- 矢沢大二 (1992) : Martin Schwind 先生の逝去を悼む, 「地理学評論」, 65-4, 295-296頁。
- 横山昭市 (1977) : 『アメリカ人の日本観と都市観—1976年のサクラメント研修団アンケート調査—』, 愛媛大学法文学部地理学教室, 33頁。
- 横山昭市 (1981) : 『サクラメントの発展と都市再開発』, 松山サクラメント姉妹都市促進代表団, 36頁。
- Ninomiya, Z. K. (1984) : Cognitive Map and Sister City Relationship, 「愛媛の地理」, 10. 9-10頁。
- 安藤美和 (地方部記者) : 特集「姉妹都市20年—松山・サクラメント—」, 愛媛新聞, 2001年9月11日号～9月19日号。
- 横山昭市 (1994) : 愛媛県, 『日本の地域レベルの国際化と米国の交流活動』(日本文). vol.1, 国際交流基金日米センター, 351-360頁。
- Yokoyama, S. (1994) : Ehime, The Survey Reports on

- Regional Internationalization and U. S. -Related Exchange Activities in Japan, vol. 1. The Japan Foundation, Center for Global Partnership, pp. 95-110.
- 北米毎日 (1996) : 秋の外国人叙勲 SF 管内, *Hokubei Mainichi*, 1996年11月5日号, p. 2.
- 日米タイムズ (1996) : 北加の米国人2人に叙勲, *Nichibei Times*, 1996年11月5日号, p.2.
- Kakiuchi, G. H. and Murakami, S. (1961) : Satsuma Oranges in Ōcho-Mura, A study of Specialized Cash Cropping in A Southwestern Japan. *Geographical Review*, LI-4, pp. 500-518.
- 横山昭市 (1974) : 『日本研究プログラム派遣教授報告 (ワシントン大学) 1973-74』, 日本研究部資料10号, 国際交流基金, 63頁.
- 垣内・G. H. (1975) : 外国の地理学界の学友一村上先生の思い出のかずかず (英文), 村上節太郎先生退官記念随想集, 『からたち』同記念会刊, 343-348頁.
- カキウチ・G. H. (1994) : 横山教授退官へのメッセージ (英文), 『ザ・ウェイク—航跡—』横山昭市教授退官記念事業会刊, 54頁.
- 横山昭市 (1990) : G. H. カキウチ先生の研究の業績, G. H. カキウチ先生退官記念会編『アメリカ・カナダの自然と社会』, 大明堂, 5-14頁.
- Yokoyama, S. (1991) : "George H. Kakiuchi", *The CHRONICLE*, V. Dept. of Geography, University of Washington, Seattle, pp. 5-11.
- 石田寛 (1985) : ミシガン学派による草創期の日本地理研究, 石田寛編 (前掲書), 古今書院, 39-53頁.
- 横山昭市 (2001) : 『G. H. 垣内先生叙勲推薦関係資料』, 27頁.
- The Yomiuri America (2002) : 地理学研究の垣内氏, *Yomiuri-shimbun Seattle Edition*, May 4, 2002, p. 2.
- Deweese, J. (2002) : Japan's emperor honors UW professor-G. H. Kakiuchi, *University of Washington, The Daily News paper*, May 13, 2002. p. 1 and p. 12.
- N. A. P. (2002) : ジョージ・垣内 ワシントン大学名誉教授・叙勲伝達式行われる. 「北米報知」, 5月29日, 2002年, p.5.
- Yu. C. N. (2002) : Emperor honors local professor-G.H.Kakiuchi, *North West Asian Weekly*, June 7. 2002, p. 1 and p. 14.
- Schöller, P. (1984) : Matsuyama und das Städtesystem Japans, 「愛媛の地理」, 10, 7 - 8 頁.
- 横山昭市 (2002) : 日本政治地理学の軌跡, 高木彰 (日本地理学会政治地理学研究・作業グループ) 編, 『日本の政治地理学』古今書院, 3 - 20頁.
- 横山昭市 (2004) : アメリカ政治地理学のパイオニア, S. B. ジョーンズ, 「地理」, 49-1, 92-99頁.
- 森川洋 (1995) : 20世紀の地理学者たち (14) - ベーター・シュラー, 「地理」, 40 - 8, 76 - 83頁.

以上